3. 3才児における発達水準と母子分離の可能性について

依田　明（横浜国立大学）

序

子どもの発達の過程は，独立的・自立的な社会人に子ども自らが形成し，周囲の人間から形成されていく過程とみなすことができる。独立的・自立的な人間というと，一般には，精神的・経済的な自立を意味することが多い。このような自立は青年期以後に確立するもので，ここでは青年期を精神的自立の時期と名づける。しかし，この段階に至るまでの過程には，様々な自立のための課題が存在し，その課題を解決することによって，最終的な精神的自立に至るのである。子どもが独立的自立的になっていく過程には，子どもに置かれた達成課題を解決していく必要がある。誕生後約1年間は，いわば母子一体感の時代であり，主として母親に依存し，養護されることによって生命を維持している。しかし，この間も母乳やミルクといった液体による食物摂取から，次第に固形食を摂取していかねばならないといったように，自立のための課題を克服しなければならない。1才を過ぎると歩行を開始し，発語を始める。歩行や言語獲得も各々その年令の発達課題であって，それらを克服することによって自立的になっていく。この年令になると，母親への全面依存から徐々に脱却し，洋服の着脱や排泄のコントロール等基本的生活習慣を獲得しなければならない。いわば，この1才から3才までの年齢段階は，身体的自立の時期といえよう。

身体的自立が獲得されると，母親への依存度は減少し，行動的に自立していくことが可能となっていく。性の区別を知り，主として男児は父親を，女児は母親を同一視の対象として，各々の性にふさわしい行動特性を身につけていく。また，両親からのしつけを通して道徳心を獲得し，それによって行動が規制されるようになっていく。子どもは，就学すると，学業という新たな課題が与えられ，社会の文化遺産を獲得するとともに，創造的能力を養っていかねばならない。3・4才から11・12才の年令段階は，行動の自立の時期ともよばれている（久世，1980）。

この行動の自立は，母子分離が時間的空間的に可能になることによって，成立していくものと思われる。母子分離が可能になるための条件として考えられるのは，Bowlby, J.(1951)やAinsworth,M.(1978)が指摘するように，アタッチメント（Attachiment）の形成であろう。しかし，そればかりでなく，諸々の領域における子どもの発達水準も大きな要因であると考えられる。本研究では，3才児を中心にして，子どもの発達水準と母子分離の可能性について検討することを目的とした。

方　法

1. 被験者　神奈川県横浜市内にある幼児教室に通う母子80組（男児42名，女児38名）年令は，入所児2才半から退所時4才半である。

2. 手続き①幼児の発達水準を測定する質問紙（資料1）を幼児教室入所時（2才半～3才半）入所中（3才～4才），退所時（3才半～4才半）の年3回母親に記入させた。

質問内容は，基本的生活習慣（食事，着脱，排泄，清潔，睡眠），社会的行動（所有概念，社会的ルールの内容化，我慢力・耐性，社会性，思いやり），遊び（仲間・親との関係，個人的能力），伝達行動（話すこと，聞くこと，話し合うこと），技術的能力など5領域69項目である。ただし，入所中，退所時に行なった調査では，社会的行動の耐性に関する項目が新たに3項目加えられている。新たに加えられた3項目については，入所中，退所時の2時点でのみ検討する。

結果と考察

表1は，各発達領域の各時点における平均通過率を示したものである。

基本的生活習慣のうち食事，排泄，睡眠は，分

離児，不分離児の間に入所時から退所時まで大きな相違はみられない。食事の習慣については，むしろ不分離児の通過率の方が高くなっている。しかし，着脱や清潔の習慣では，不分離児は一貫して分離児より通過率が低い。食事，排泄，睡眠といった身体的生存に必須の領域では，差がないのに，服の着脱や清潔といった領域では，直接身体的生存に関係しないこと，親への依存度が関与しやすいことのため，差が生じやすいと考えられる。

社会的行動の領域は，分離児，不分離児に大きな差がみられる。特に不分離児は，社交性が低く，場所みしりをしやすい。更に，耐性や思いやりの領域でも低い。社会ルールの内面化では，入所時不分離児は，分離児より低いが，時間の経過とともにその差は小さくなり，退所時には不分離児の75％以上の者が身につけている。このことは，幼児教室に通い，友人との接触によって身につけたためと考えられる。しかし，その内容については，分離児と不分離児の間に若干の相違がみられる。すなわち，「貸して」や「ありがとう」ということばは，入所時に分離児より通過率が低いが時間の経過とともに分離児とほぼ同じようになっていくのに対して，「ごめんね」や「どうぞ」といったことばは，一貫して分離児より低く，「ごめんね」ということばに関しては，入所時より入所中のほうが低くなっているぐらいである。自分の要求を表現したり，要求を満たしてくれることに対することばは，言えるが，相手の立場を考慮しなければならないことばは言えないことを示している。このことは，分離児は，不分離児より「自己中心性」が強いことを意味している。

耐性は，両者の間の差が最も大きく，「かんしやく反抗することなく，感情が統制できる」の項目（入所時の資料はない）では，分離児が入所中67％，退所時78％と徐々に可能になっていくのに対して，不分離児は入所中も退所時も0％である。全体的にも不分離児は，耐性が入所時より，入所中のほうがむしろ低くなり，対人関係が重要となる新しい環境のなかでは，我慢する力やセルフコントロールする納力が養われないどころか，むしろ環境の圧力に圧倒される自我の弱さを表わしているとみてよい。

思いやりについても，分離児より不分離児のほうが低く，「年下の子や妹・弟などのめんどうをみる」ことや「協力してひとつのことをすることができる」ことなどができない。このことも，先に述べた不分離児の「中己中心性」の特徴を表わすものであろう。

遊びの領域では，親との関連のうち「母親から離れて遊びにいける」の項目は，母子分離に関連するので当然であるが，入所時に分離児より不分離児の通過率は低い。しかし，不分離児も，時間の経過とともに通過率が高くなり，退所時には，90％近くの者が可能となっていく。

「30分以上砂場で遊べる」能力は，分離児は入所時から100％の者が身につけているのに対し，不分離児は，入所時78％であるのに退所時には56％と低くなり，先に述べた耐性の弱さを示している。

伝達行動では「話す」能力は入所時から退所時まで分離児と不分離児は変わらないが，「聞く」能力は不分離児のほうが入所時から劣っていて，退所時まで進歩がほとんどみられない。これらのことも，自分のしてほしいことなど自分の要求の表現は可能であるが，「指図を聞いたとおり行動できる」や「話す人の顔を見ながら，黙って話を聞くことができる」ができないなど，不分離児の「自己中心性」を表わしているとみてよい。また「話し合い」も，不分離児は，「家の人との話し合い」はよくできるが，入所当初は「近所の人や初めての人との話し合い」はできていない。しかし，時間の経過とともに，近所の人とも話し合いができるようになっていく。ところが，「はじめての人と話ができる」能力は，入所時分離児も不分離児もともに44％の者しかないが，分離児は時間の経過とともに増加していく。一方不分離児は，入所中まで停滞し，退所時に多少上昇するもののその率は分離児より低い。先に不分離児は，「場所みしり」が強いことを述べたが，「人みしり」も同時に強く，新奇な刺激に対する不安の傾向が強いことを示している。

技術的能力の領域は，「絵の具の使用」と「はさみの使用」の2つの項目よりなるが，両課題とも，分離児・不分離児の両者にとっては，それまでの経験の頻度は少ないと思われる。そのため，分離児も不分離児も通過率は，ほぼ同様で低い。

しかし，分離児は，時間の経過とともに，可能になり，退所時には90％近くのものが出来るようになる。一方不分離児は，上昇率が低いばかりでなく，入所中と退所時では停滞している。

不分離児は，社会的行動・遊び，伝達といった社会性の側面ばかりでなく，新しい課題に挑戦し技能を発達させていくといった領域でも発達が良くないことを示している。

要　　約

本研究は，3才児の母子分離の可能性と発達水準との関連を検討することを目的とした。横浜市内にある幼児教室に通う幼児80名の母親に，70項目から成る質問紙を施行し，母子分離の可能な幼児と困難な幼児の行動を，入所時，入所中，退所時別に比較した。

主な結果は，以下のとおりである。

①基本的生活習慣のうち，服の着脱と清潔の項目は，不分離が分離児より劣る。食事，排泄，睡眠の項目では，大きな相違はみられず，食事の習慣についてはむしろ不分離児の方が優れている。これらのことは，服の着脱や清潔といった直接身体的生存に必要としない領域では，親への依存度が強く関与するためではないかと考察された。

②社会的行動の領域は，分離児・不分離児の差が大きい。社会ルールの内面化では，入所当初は不分離児は，分離児よりかなり低いが，退所時には，75％以上の者が身につけていく。但し，自分の要求を表現することば（貸して）や要求を満たしてくれることに対することば（ありがとう）は言えるが，相手の立場を考慮しなければならないことば（ごめんね，どうぞ）は言えない。

「おもいやり」についても不分離児は，分離児より低い。これらのことは，不分離児は，「自己中心性」が分離児より強いことを示唆している。

分離児は，耐性も弱く，我慢する力やセルフコントロールの能力が低い。このことは，幼児教室という新しい環境の圧力に圧倒される不分離児の自我の弱さも表わしている。

③遊びの領域では，母親から離れて遊びに行けるの項目は，当然のごとく不分離児が少ないが，時間の経過とともに可能になっていく。30分以上砂場で遊べるの項目も，不分離児は低く，時間の経過とともに進歩することはない。このことは，②に述べた耐性の弱さにも関連している。

④伝達行動の領域では，「話す」能力は分離児・不分離児の間に差はないが，「聞く」能力は不分離児が劣っている。このことも，②で述べた不分離児の「自己中心性」の特徴を表わしている。また「話し合い」では，特に「はじめての人と話しができる」能力が不分離児に低く，「場所みしり」と同様に新奇刺激に対する不安傾向が高いことを示している。

⑤技能の領域は，「絵の具を使うこと」と「はさみを使うこと」の2項目からなるが，これらの能力は，分離児不分離児とも入所当所は低い。しかし，分離児は，時間の経過とともに，これらの能力を急速に発達させていくのに対し，不分離児には急速な上昇はみられない。不分離児は，社会性の発達ばかりでなく，技能の発達でもよくないことをふした。

表1. 領 域 別 通 過 率

通過率（％）

項目	SS	入所時		入所中		退所時	
		分離児	不分離児	分離児	不分離児	分離児	不分離児
生活習慣	1. 食事	55.5	55.5	71.1	77.8	84.4	86.7
	2. 着脱	65.1	47.6	76.2	74.6	88.9	79.4
	3. 排泄	88.9	77.8	100.0	100.0	100.0	100.0
	4. 清潔	50.0	36.1	55.6	41.7	86.1	61.1
	5. 睡眠	63.0	55.6	74.1	74.1	70.4	88.9
社会的行動	6. 所有	83.3	72.2	88.9	94.4	94.4	88.9
	7. 社会ルール	70.0	50.0	73.3	60.0	87.8	75.6
	8. 耐性	66.7	51.9	70.4	42.6	87.0	53.7
	9. 社交性	72.2	55.6	83.3	50.0	88.9	55.6
	10. 思いやり	86.1	52.8	80.6	72.2	94.4	69.4
遊び	11. 仲間	82.2	75.6	82.2	75.6	84.4	86.7
	12. 親	61.1	44.4	66.7	44.5	72.2	72.2
	13. 個人	88.9	70.4	88.9	81.5	100.0	81.5
伝達	14. 話す	81.1	74.4	81.1	84.4	88.9	85.6
	15. 聞く	77.8	61.1	83.3	61.1	88.9	66.7
	16. 話合い	81.5	74.1	92.6	77.8	96.3	88.9
技能	17. 技能	44.4	38.9	72.2	61.1	88.9	61.1

資料1　発達検査

お子さんの日常のようすについて次の質問にお答え下さい。

貴方、お子さんにできることについては○、できないことには×を欄右側に記入して下さい。ただし、できるというのは4回のうち3回以上できる場合です。したがって、4回のうち2回の時でできても、できないとします。また、この検査は、単なる能力（それができるか、できないか）ではなく、自主性、意欲をもきめた能力（自分で、人の手をかりずにやる）を測るものです。ですから、例えば「靴をひとりではける」に対して、はくことができても（お母さんはかせて）などと援助をもとめ、ひとりではかない場合はできないとします。

		質問項目
基本的生活習慣	食事	①さじを使って、こぼさないでたべる
		②はしを使って、こぼさないでたべる
		③一定時間内にテーブルにすわってたべる
		④食事の前に「いただきます」がいえる
		⑤食事の後に「ごちそうさま」がいえる
	着脱	⑥お風呂に入る時など、ひとりでパンツが脱ける
		⑦お風呂に入る時など、ひとりで上着が脱ける
		⑧お風呂に入る時など、ひとりで、ファスナー、ボタン等のついている洋服が脱ける
		⑨ひとりでパンツがはける
		⑩ひとりで上着が着られる
		⑪ひとりでファスナー、ボタン等のついている洋服が着られる
		⑫靴をひとりではける
	排泄	⑬排便を予告する
		⑭排尿なら、ひとりでトイレに行ける
	清潔	⑮外から帰ったら、手が洗える
		⑯外から帰ったら、うがいをする
		⑰ひとりで顔を洗える
		⑱ひとりで歯がみがける
	睡眠	⑲一定時刻になったら、ひとりでベッドに入れる
		⑳起床時に「おはよう」が言える
		㉑就寝時に「おやすみ」が言える
社会的行動	所有	㉒自分のものと他人のものの区別ができる
		㉓自分のものとみんなのものの区別ができる
	対人関係・言葉	㉔ブランコ、すべり台などの順番が守れる
		㉕あのちゃなどをゆずり合って遊べる
		㉖悪いことをした時、物を貸したり借りたりする時に
		ごめんね ㉗ありがとう ㉘貸して ㉙どうぞ などのことばが言える
		㉚「こうして、いい？」と許可をもとめる
		㉛近所にことわって友達の家に遊びにいく
		㉜簡単な約束を守れる
		㉝無手にごみを捨てない。
社会的行動	自閉性	㉞人が沢山いる所で大騒ぎをしない
		㉟電車などで泣かなければ立てる（座りたいとさわがない）
		㊱おもちゃやお菓子などを買ってくれと、ダダをこねない
		㊲決められた時間が来たら、テレビをとめられる
		㊳時間をしてひとつのことをやれる
		㊴かんしゃく反抗することなく、要求が抑制できる
	対人関係	㊵人みしりをしない（はじめての人に会っても、母親のうしろにかくれたりしない）
		㊶場所みしりをしない（見慣れないところに行っても、あばれたり母親にしがみつかない）
	協調性	㊷年下の子や弱、病などのめんどうをみる
		㊸ともだちや兄弟に思いやりがある
		㊹母親と手伝ってくれる
		㊺協力してひとつのことをすることができる
遊び	集団の遊び	㊻ひとり遊びができる
		㊼ふたり遊びができる
		㊽3人以上で遊べる
		㊾年上の子どもと遊べる
		㊿リーダーシップがとれる
	遊び	(51)母親から離れて遊びに行ける
		(52)けんかをしても親の所へ近いてこない
	個人能力	(53)ままごとで役を演じることができる
		(54)みたて（つもり）遊びができる
		(55)30分位上静かで遊べる
言語	話す	(56)名前をよばれたとき、返事をすることができる
		(57)仕事をいいつけられたとき、返事をすることができる
		(58)たずねられたことについて、返事をすることができる
		(59)自分の名前 (60)家族の名前 (61)住所 を言うことができる
		(62)したいこと、してほしいことを身ぶりでなくことばで言うことができる
		(63)わからないことや、わからないこと、不想議に思うことを聞くことができる
		(64)簡単な伝言をすることができる
		(65)絵を描いて、それについて話すことができる
	聞く	(66)指図を聞いたとおりに行動できる
		(67)話す人の顔を見ながら、黙って話を聞くことができる
	対人関係	(68)家の人と (69)近所のおばさんと (70)はじめての人と 会話ができる
感覚		(71)絵の具が使える
		(72)はさみが使える

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

序

子どもの発達の過程は,独立的・自立的な社会人に子ども自らが形成し,周囲の人間から形成されていく過程とみなすことができる。独立的・自立的な人間というと,一般には,精神的・経済的な自立を意味することが多い。このような自立は青年期以後に確立するもので,ここでは青年期を精神的自立の時期と名づける。しかし,この段階に至るまでの過程には,様々な自立のための課題が存在し,その課題を解決することによって,最終的な精神的自立に至るのである。子どもが独立的自立的になっていく過程には,子どもに置かれた達成課題を解決していく必要がある。誕生後約1年間は,いわば母子一体感の時代であり,主として母親に依存し,養護されることによって生命を維持している。しかし,この間も母乳やミルクといった液体による食物摂取から,次第に固形食を摂取していかねばならないといったように,自立のための課題を克服しなければならない。1才を過ぎると歩行を開始し,発語を始める。歩行や言語獲得も各々その年令の発達課題であって,それらを克服することによって自立的になっていく。この年令になると,母親への全面依存から徐々に脱却し,洋服の着脱や排泄のコントロール等基本的生活習慣を獲得しなければならない。いわば,この1才から3才までの年齢段階は,身体的自立の時期といえよう。